2014　第２号

韮高 SSH だより

2014.6.24　発行

梅雨の晴れ間の太陽がとてもまぶしく感じる季節になりましたね。2 年 SSH 文系チームです。これから宜しくお願いします。m(_ _)m　　初めてのテーマは・・・・こちらです！

絶滅危惧種（Endangered Species）

一度は聞いたことがある言葉ですよね。文字の通り、絶滅の恐れがあると指定された野生動物の種類、という意味です。

私たちにも馴染みのある魚・ニホンウナギ。少し前に、世界の科学者で組織する国際自然保護連合（IUCN,スイス）がニホンウナギを、絶滅の恐れがある野生動物に指定するレッドリストに加えたのはご存知の方も多いと思います。それによってすぐにウナギが食べられなくなる、というわけではないのですが、ワシントン条約（こちらは野生動物の国際取引を扱っています）ではこのレッドリストが保護対策の参考になっているので、将来輸入が制限されることが心配されます。身近な生き物のレッドリスト入りは生態系や地球環境の変化が急激に進んでいることを示していて、対策が急がれることは言うまでもないでしょう。

実は世界規模とまでは行かなくても、生き物の激減は身近でも起こっているんです。生き物が大好きで虫にお詳しい理科助手の根津先生にお話を伺ったところ、**一部の「ミノムシ」が急に減ってしまった**、ということでした。まず、簡単にミノムシの紹介をしますね。ガの仲間にミノガ科というグループがあって、このミノガの幼虫が作る巣をミノ，中の幼虫をミノムシと呼びます。ミノというのは昔の人が農作業の時などに使った雨や、暑い日差しを避けるための蓑（みの）からきています。イメージとして、冬に葉を落とした木の枝などにぶら下がっているミノムシが思い浮かぶのではないでしょうか。これはミノガの中でも一番大型のオオミノガというミノムシです。そんな**オオミノガがここ数年の間に、ほとんど見られなくなってしまった**そうです。何が原因なのでしょうか？また、その進行状況は？少し詳しく根津先生に説明していただきました。

中庭のトウカエデから採集されたミノムシ

「本州や九州ではもう見ることができないといわれるほどオオミノガは激減したと言われています。その原因はなんと、ハエに食べられた、ということなんです。ハエといっても家の中を飛び回るキンバエなどではなくて、オオミノガヤドリバエという寄生するハエが、オオミノムシを専門に食べてしまったのです。このヤドリバエは、オオミノガの幼虫がミノから頭を出して葉を食べている所をねらって、葉っぱにものすごく小さな卵を産みつけます。ハエの卵は幼虫が葉を食べるときに一緒に食べられて体の中に入り、卵から孵化したハエの幼虫がミノムシの体を中から食べてしまうのです。このハエ、中国南部から南アジアに生息する外来種で、日本では１９９５年頃に発見されましたが、どうやって入ってきたかは不明だそうです。このようにして、あっという間に多くのオオミノガが姿を消し、福岡、神奈川などのいくつかの県では自治体レベルのレッドデータリストに載せられるまでになってしまいました。」

根津先生、丁寧なご説明ありがとうございました！

今回取り上げたミノムシは、枕草子にも取り上げられているほど（＊以下をご覧下さい）古来日本人にもなじみのあった生き物だったようです。現在でも、伝統工芸や簡単な理科の実験にもミノの仕組みは生かされているそうですよ。

見かけるのが当たり前だと思っていた生き物が減っている。自然の成り行きであったとしても、また、人間の手による環境破壊が要因であったら更に、無関心ではいられません。みなさんも、もし家のまわりの木に大きなミノがぶら下がっていたら、どうかそっと見守ってあげてくださいね。

ところで、韮崎高校ではチャミノガという少し小さいミノムシがたくさん見られる場所があるんです。チャミノガは、小枝をびっしり貼り付けたミノを作るのが特徴で大きさはオオミノガの半分くらいしかありません。中庭にある木のうちの一本（トウカエデという木）に、実は数週間前からチャミノガが大発生しています！せっかく清掃したのに次の日には木の周りは黒いころころしたフンだらけ！という大迷惑な事態が起きていました（ミノムシは一般的には害虫です）。業務員さんが脚立を使って一生懸命駆除してくださいましたが、確かにまだ木のあちらこちらにミノムシがぶら下がっています。

駆除されたたくさんのチャミノガのミノムシ

アオスジアゲハ幼虫

（分かりますか？）

中庭にはもう一本木がありますが、こちらの木にはミノムシが一匹もついていないんです。その木はクスノキ（楠）といって、ミノムシの仲間はその葉っぱは食べないそうです。クスノキを食草とするチョウのなかまでよく知られているのがアオスジアゲハです。

現在ＳＳＨ事務局のある生物準備室では、トウカエデについていたチャミノガのミノムシと、クスノキについていたアオスジアゲハの幼虫を大事に飼育中だそうです。興味のある人はぜひ覗きに行きましょう！蛹がチョウになる瞬間に立ち会えるかもしれませんよ。

＊＊＊

Ｑ．枕草子にミノムシはどんな風に登場するのでしょうか？

蓑虫いとあはれなり。鬼の生みたれば、親に似てこれもおそろしき心あらむとて、親のあやしき衣引き着せて、「いま秋風吹かむをりぞ来むとする。待てよ」といひおきて、逃げて往にけるも知らず、風の音を聞き知りて、八月ばかりになりぬれば、「ちちよ、ちちよ」とはかなげに鳴く、いみじうあはれなり。（第 41 段）

口語訳

ミノムシはとても風情がある。ミノムシは鬼が生んだので、親に似てこれも恐ろしい心を持っているだろう、というので親の粗末な着物を引き着せて、「もうすぐ秋風が吹く頃になったら迎えに来るから、待っていなさい」 と言って逃げて行ったのも知らずに秋風の音を聞き知って、８月ごろになると「ちちよ、ちちよ」 と、頼りなさそうに鳴くとてもしみじみした感じがする。

◆国語科の折居先生に、簡単な解説をお願いしました。なるほど・・・(^^)♪

「鬼に捨てられた子が『父よ』と鳴くなんて悲しげな話ですが、ミノムシが鳴くはずありませんよね。たぶん、昔の人が他の生き物の声と勘違いしたのが定着してしまったのでしょう。俳句でも『蓑虫鳴く』は季語となっていて松尾芭蕉にも『蓑虫の音を聞きに来よ草の庵』という有名な句があります」

ミノムシは、こういった古典文学と現代のつながりのようなものも感じさせてくれるんですね。文系のみなさんにも、少しでも興味を持っていただけたら嬉しいです！　　（文責　２年７組 中込彩乃）

お知らせ　3 年 SSH 課題研究成果発表会　7/12（土）午前中開催します。ぜひご参加ください！